これはTAMAらん!!
東京多摩「SDGs」ビジョン

高品質多摩産材「TOKYO WOOD」による地産地消の家づくりが活況!!

東京都の森林面積は約4割で7万8566ヘクタール、その多くを占めるのが多摩地域だ。スギやヒノキなどかつて木材用に植林された人工林率が約6割、ほんの10数年前までこれらの木は建材としてはほとんど活用されていなかったが、近年、あらたに「TOKYO WOOD」の名のもとに高品質な建材としてのブランド化がすすんでいる。多摩産木材とその住宅の魅力とはどんなものなのだろうか。

おつ 多摩げた!!
東京多摩発の高品質建材「TOKYO WOOD」が拡大中!?

（上段・中段）TOKYO WOOD バスツアーの様子。東京多摩地域における木造住宅での暮らしに関心を持つ参加者が数多く集まる（下段）小嶋工務店では、実際に宿泊することで多摩産材の家を体感できる宿泊体感モデルハウスも手掛けている。このほか、多摩各地に4拠点のモデルハウスがある

大きく太く育った木を秋・冬に伐採し、春先に跡地に植林、夏はその周囲の下草を刈る――。こうしたサイクルを繰り返し、山林を長く維持・管理していくのが循環型林業の基本だ。が、東京多摩地域では輸入材の台頭や担い手不足などを背景にそのサイクルが失われ、長年にわたって地元産木材で住宅が建てられることはほとんどなかった。せっかくの地域資源が眠ったままになっていたのだ。

そうした状況が変わりはじめたのは2006年。当時の石原慎太郎都知事の一声ではじまった「花粉対策事業」で大木の伐採がすすんだことで、あらためて循環型林業を取り戻そうという機運が高まったのだ。そして今、多摩産の高品質な建材ブランド「TOKYO WOOD」が注目を集めている。その仕掛人である㈱小嶋工務店（東京都小金井市）の小嶋智明社長は約10年前、東京多摩地域の林業家・製材業・プレカット工場・工務店・建築士に連携を呼びかけ、一般社団法人TOKYO WOOD普及協会を設立し、地元産のヒノキやスギを東京都内の住宅の建材として活用する「地産地消」にチャレンジ。「数年かけて、伐採から製材、天然乾燥、グレーティング（品質検査）、プレカットまで地元で一貫して手掛ける体制をつくりあげた」という。地元の木材を地元で使うため「海外から木材を運搬することで起こる環境負荷を大幅に軽減できた」のはもちろん、「工務店が木材卸売業者や製材工場と連携することで仲介業者によるマージンや手数料がかからず、コストカットにもつながった」と小嶋社長は話す。

そして当然、品質にはトコトンこだわった。「時間がかかる天然乾燥を行うことで変色や変質を防ぎ、無垢材の弱点である反りやゆがみに対しても『四面背割れ』の技術を取り入れる」など手間を惜しまず、厳正な審査でその品質を数値化して示し、木材としてのブランド力を向上させたのだ。さらにその一方では基準に達しない木材も床材などに余すところなく活用するなど、「TOKYO WOODにかかわる全員が納得し、おたがいにフラットな関係性で持続的に事業を継続していけるよう心がけた」という。

このような体制づくりとともに、小嶋工務店ではTOKYO WOODの強みや魅力を体感できる場づくりにも取り組んでいる。たとえば3～4カ月に1度、「TOKYO WOOD バスツアー」を開催、参加者を林業の現場に連れて行き、普及協会に所属する林業家や工務店、製材所の職員が案内役となってそれぞれの思いや多摩産材の品質などについて話すそうだ。「こうした機会を重ねることで、少しずつTOKYO WOODの認知度が高まり、東京多摩地域における地産地消の家づくりが広がっている」と小嶋社長は微笑む。本誌40頁「多摩の力」で紹介した㈱東京チェンソーズの取り組みと合わせ、今後の多摩産材活用のさらなる拡大と多様化に期待したい。

TOKYO WOODの普及に尽力する小嶋社長。同社は1965年に創業、東京多摩地域とその近郊で年間約70棟の注文住宅やリフォーム・リノベーションを手掛けている

東京都で一番自然豊かな檜原村で多摩の木を体感!!

近年、西多摩地域の檜原村に、多摩産木材の魅力を体感できる施設やスポットがつぎつぎと誕生している。さっそく、「檜原 森のおもちゃ美術館」と会員制アウトドア森林フィールド「MOKKI NO MORI」を紹介!!

木のぬくもりを感じられる遊び場 檜原 森のおもちゃ美術館

東京都新宿区にある東京おもちゃ美術館は、日本の木のおもちゃや海外のデザイン性の高いおもちゃなどを手にとって楽しめる交流＆体験型ミュージアム。同館では「おもちゃと遊びの文化を広める」ため、全国に「姉妹おもちゃ美術館」を展開、各地で官民問わず立ち上げられた組織がその運営を担っている。

21年11月、檜原村にオープンした「檜原 森のおもちゃ美術館」もそのひとつだ。この体験型ミュージアムのウリは、面積の9割以上が森林である檜原村ならではの特徴を生かし、建物の木材のほぼすべてが村内産だということ。事実、建物に一歩入れば、木の香に包まれ、リラックスした気分に浸ることができる。

木のぬくもりタッブリの遊び場。床はヒノキ材、壁はサワラ材、赤ちゃんコーナーの床はやわらかなスギ材でできている。もちろんいずれも村内産

1Fメインフロアには広々とした遊び場が広がっており、「山ひろば」や村内を流れる北秋川をイメージした「ヒノキのたまごプール」のほか、名産のユズの木をモチーフとしたシンボルツリー、キノコや野菜を収穫できる木のおもちゃ、山から伐採した木を運び出すトラックのおもちゃなど、檜原村の地形や自然環境、地場産業、特産品がさまざまな形で表現されている。開館以来、地元の親子連れ客に大人気となっているのはもちろん、遠方から遊びに来る人も多い。木のぬくもりを感じながら遊べる、まさに多摩産木材の魅力発信にも打ってつけの拠点だ。

檜原の森でプライベートなアウトドア体験を堪能 MOKKI NO MORI

「MOKKI NO MORI（モッキノモリ）」は、MOKKI㈱と㈱東京チェンソーズ（本誌40頁）が手掛ける会員制アウトドア森林フィールド。会員限定でさらに1日の入場者数も制限しており、ゆったりとアウトドア体験ができると話題になっている。メインの「KIKORI FIELD」は東京チェンソーズの社有林の一角、檜原村の観光スポット「払沢の滝」上流に位置しており、森の間伐材を使って薪割りや焚火、ブッシュクラフトなどを行うこともできる。電源・水道なしで上級者向けだが、今後、初心者フィールドなども順次整備していくほか、アウトドア術や山仕事を学べる会員向けプログラムも実施予定とのこと。檜原村の大自然を体感できるMOKKI NO MORI、キャンプ初心者から上級者まで要チェックだ。

KIKORI FIELDでのキャンプ。年会費はソロ11万円、ファミリー13万2000円、予約すればいつでも利用することができる

問 NPO法人 東京さとやま木香會（檜原 森のおもちゃ美術館）
東京都西多摩郡檜原村小沢3783
☎ 042-588-4044　www.hinohara-toymuseum.com
問 MOKKI㈱　mokki.jp

ウッドショックやコロナ禍が日本の林業の弱点を浮き彫りに

昨年春、カナダの森の虫害やアメリカの住宅バブルなどの影響で、アメリカやカナダ、ヨーロッパの建材価格が高騰した。さらに現在、ウクライナ危機でロシアや北欧からの木材輸入がストップしたことで需給バランスがさらに崩れ、建材価格の高騰と品不足がつづいている。この「ウッドショック」の渦中にあって、日本では国産材活用の好機が到来したともいわれているが、林業従事者の高齢化と担い手不足で、木材の搬出もままならず、量を出せないのが実態。専門的なノウハウが必要で危険も多い現場でもあるため、人材育成にも時間がかかるので、需要があるからといってすぐさま生産増とはいかない。資源がたくさんあるのに、産業構造がその活用に追いついていないのだ。今回、「多摩の力」（本誌40頁）や本コーナーで取り上げた持続可能な林業の確立が求められている。